

●沖縄は、日本本土で唯一戦場となった島

▽沖縄戦を象徴する 大田実(海少将)の電報

「沖縄県民斯克戦ヘリ 県民ニ対シ

後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」

▽第一に 島民が 軍の指揮下に置かれて

戦闘に組み込まれ 軍民一致で行なわれたこと

第二に 軍と島民混在の沖縄南部が 戦場になり

多くの住民を 巻き添えにした「悲劇の島」に

▽戦死者は 約18万8千人(沖縄県教育委員会「沖縄県史」)

・日本軍は 6万6千人弱

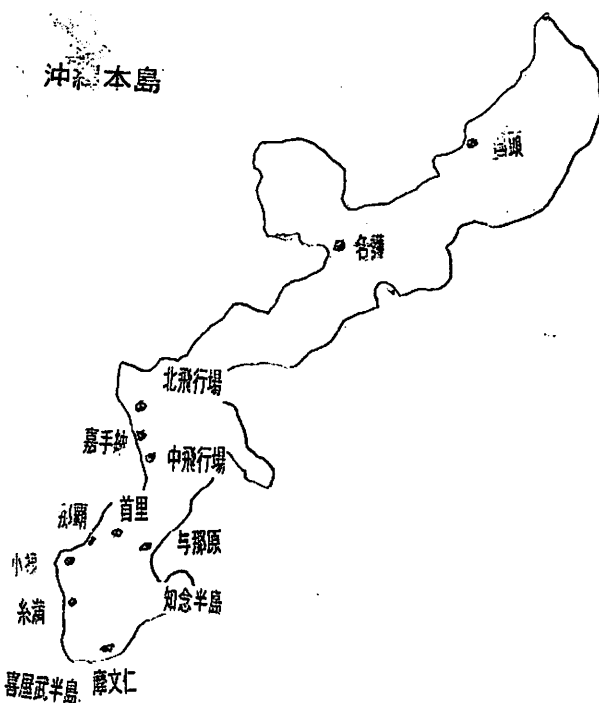
・県民男子(満17歳~45歳)を 防衛召集したが

島民義勇兵と 戦闘協力者が 2万8千人余り

・一般島民も 9万4千人 島民の犠牲者は65%に

▽戦える者は 全て 軍に所属させられた

最年少は13歳「島ぐるみで軍と共に戦った島」



●南の平和な島が、昭和19年に入り「戦場の島」に

▽南西諸島防衛のため 3月22日 第32軍を編成

独立混成2個旅団を 配置することにしたが

九州から輸送途中 潜水艦攻撃で 主力が水没

▽そこへ 6月15日 米軍がサイパン島上陸

沖縄の防衛強化に迫られ 急遽 満州から

第9師団 第28師団 戦車第27連隊を 32軍に編入

▽57万沖縄島民を どうやって 戦火から守るか

ことに 老幼婦女子の疎開問題が 緊急の課題に

▽西南戦争(明治10年)以後 国土戦の経験がない

日清 日露戦争以来 常に 外地で戦ったから

国土戦の研究も してこなかった

▽サイパンでは 島民の島外引き揚げが

遅れたため 住民を巻き込んだ「玉砕の島」に

▽大本営は サイパン奪回作戦指揮官として

関東軍から 長勇(海少将)を呼び寄せていたが

7月1日 長を沖縄に派遣し

非戦闘員の疎開について 研究を命じた

▽政府は 7月7日(サイパン陥) 緊急閣議で

長の視察報告に基づき 沖縄の集団疎開を決定

長も 8日付で 中將に昇進

第32軍参謀長に任命され 島民疎開を推進

大田 実(おた・みのる)

明治24(1891)~昭和20(1945)福岡県生まれ。海軍少将。昭和7年、上海事変で上海特別陸戦隊大隊長。佐世保海兵団長を経て20年1月第4海上護衛隊司令官。3月に沖縄島連合陸戦隊が編成され、その司令官を兼務した。死後中将昇進

— 学生・生徒にも多くの犠牲 —

[鉄血勤王隊で戦死]

▼沖縄師範男子部288▼県立一中266

▼県立二中163▼県立三中42 ▼県立

工業106▼県立農林66▼県立水産28

▼那覇市立商業92 計1,051人

ある者は、兵士として敵陣に斬り込み、ある者は通信・伝令の任務に。

[従軍看護婦として戦死]

▼「ひめゆり部隊」沖縄師範女子部が

117 県立一高女が86▼「白梅部隊」県

立二高女33▼「瑞泉部隊」県立首里高

女49▼「梯悟部隊」私立昭和高女54▼

「積徳部隊」私立積徳高女29 計368人

●急がなければならないのが、29万の老幼婦女子

▽10万人を疎開可能者と見て

輸送船の帰りを利用 主力を九州 一部を台湾に

▽戦場気分には まだ遠く 県と市町村は

職員家族を 率先 疎開させて 気運を盛り上げ

7月21日 第1次疎開752人を 鹿児島へ

▽8月22日夜 疎開船「対馬丸」が

米潜水艦に撃沈され 1,500人が犠牲に

▽疎開気運は 一時 冷え込んだが

沖縄空襲(10月10日)が 急速に 盛り上げることに

艦載機1,400機の集中攻撃で

那覇市街地は 9割が焼失 死傷者も785人

▽米軍上陸までに 延べ187隻の船で

本土に6万 台湾に2万 計画の8割を疎開させ

学童疎開も 宮崎・大分・熊本3県に 7千人

●大本营も、沖縄の防備強化を急いだ

▽満州の第24師団 北支の第62師団を編入

第32軍は 4個師団 5個独立混成旅団に

▽軍司令官には 8月8日付で 牛島満(輝帽)

泰然とした牛島 積極果敢な長

高級参謀八原博通(輝姓)は 合理的かつ慎重

●作戦計画を、根底から修正せねばならぬ事態が…

▽第32軍は 先島諸島(宮島、石島など)に 1個師団

沖縄本島は 3個師団で 守ることにしていた

▽米軍が レイテに上陸(10月20日)して来ると

大本营は 急遽「レイテ決戦」に切り替え

第10方面軍(満)から 2個師団を比島へ

その補充を 第32軍に命じて来て

精鋭で知られる 第9師団(銀)が台湾へ

▽服部卓四郎(銀本部作戦課長)の 致命的な判断ミス

米軍が 沖縄に 航空基地を確保すれば

中国 四国も 戦闘機の行動範囲に

本土進攻を急ぐ 米軍の 次の進攻目標は沖縄

▽第32軍は 長期持久の 地上戦主体作戦に

▽沖縄は ヒョウタン型の 細長い島(長100<sup>km</sup>)

幅は 一番狭い所で3<sup>km</sup>。大体が10<sup>km</sup>ほど

▽南半分は 比較的平坦で 飛行場や

那覇 首里の市街地もあり 当然 戦場に

長 勇(ちよう・いさむ)

明治28(1895)～昭和20(1945)福岡県生まれ。陸軍中将。昭和5年、陸軍急進派の「桜会」結成に参加し、6年の満州事変に呼応したクーデター計画「十月事件」では、警視總監候補に挙げられた。歩兵第74連隊長、歩兵団長、関東軍司令部付を経て19年7月第32軍参謀長。沖縄で自決

牛島 満(うじま・みつる)

明治20(1887)～昭和20(1945)鹿児島県生まれ。陸軍中将。予科士官学校長、第11師団長、士官学校長を歴て昭和19年8月第32軍司令官。沖縄戦の指揮をとり、20年6月20日付で大将昇進。3日後自決

八原 博通(やばら・ひろみち)

明治36(1903)～昭和56(1981)鳥取県生まれ。陸軍大佐。陸大を恩賜の軍刀で卒業、昭和8年から2年間米国留学。陸大教官などを経て19年3月第32軍高級参謀。脱出の途中、米軍捕虜になり21年帰国

服部 卓四郎(はっとり・たくしろう)

明治34(1901)～昭和35(1960)山形県生まれ。陸軍大佐。昭和14年関東軍作戦主任参謀。16年参謀本部作戦課長。陸軍の主要作戦を立案、指導した。17年12月ガダルカナル敗戦で陸相秘書官に転出したが、18年10月作戦課長に再任。戦後厚生省資料整理部長。戦史資料の整理に

上級司令部に不信感

一度は、第84師団(銀)派遣を内報して来たが、一夜の糠喜びだった。作戦部長が本土決戦論者の宮崎周一(輝帽)に代わり、「海上輸送の危険を知らながら、一兵たりとも必要な本土防衛力をみすみす水没の犠牲にするわけにはいかない」と、翌日には取り消された。編成当初、大本营直轄だった

▽12月中旬「南西諸島警備要領」を作成

残った住民は島の北部へ避難させる方針

▽県庁や那覇市幹部には口実を作っては

本土へ逃げ出す者が後を断たなかった

▽泉守紀知事も12月13日

「戦時災害復旧対策の諸問題解決のため」と

称して上京したまま帰任しなかった

内務省は表沙汰にせず香川県知事に

●新知事には、44歳の島田勲(姫納政部長)

▽「決死の覚悟」を行動で示した人だった

▽昭和20年1月31日着任すると北部国頭(くにがみ)の

避難者受け入れ予定地区を見て回った

▽2月7日から連日部課長会議を開いて

食糧確保避難計画を次々と決定していった

▽国頭地区に中南部の4万人を2月中に

6万人を3月末までに立退かせることにして

11日から部落隣組常会で徹底させた

▽内政部に人口課を新設し避難業務専門に

食糧対策としては貯蔵米や薩摩芋を

受け入れ人数に応じ各町村に分散輸送

名護に建設本部避難小屋建設を急がせた

●第32軍は1月26日、最終的な陣地配備変更を実施

▽主力を首里北方の丘陵地帯に集めた

▽それより北に北飛行場(読)中飛行場(野籾)

八原(磯嶽)の考えは平地の飛行場確保に

こだわっていると犠牲を大きくするだけ

両飛行場は最初から放棄する

▽首里(彌から敷4\*)は海拔100mの台地にあり

地下30mに全長2\*と4\*の

地下トンネルを作って軍司令部を置き

前面には三重の堅固な防衛陣地を築いた

▽米軍をここに引っ張り込み長期持久の戦いを

……八原が最も重視したのが築城工事……

沖縄には至る所に洞窟があり、大きいものは1千人も入れる。それをトンネルでつなぎ洞窟陣地を作ったのだが、トンネルの総延長は100\*にも達したと言われる。

のに、西部軍(堀当)、第10方面軍(繪)指揮下と、目まぐるしく変わり、上級司令部との意思不統一の一因にも。

「南西諸島警備要領」

①凡そ、戦闘能力ならびに作業能力を有する者は、挙げて戦闘準備および戦闘に参加する。

②60歳以上の老人、国民学校以下の児童ならびにこれを世話する女子は20年3月末までに、戦闘を予期しない島の北部に避難する。

③各部隊は所属自動車その他車両、舟艇をもって、極力疎開を援助する。

④璽余の住民中、直接戦闘に参加しない者は、依然戦闘準備作業、農耕その他の生業に従事し、敵の上陸直前、急速に島の北部に避難する。

⑤県知事は、島の北部に避難する県民のために、食糧を集積し、居住設備を設ける。

島田 勲(しま・あきら)

明治34(1901)～昭和20(1945)兵庫県生まれ。大正14年内務省に入り、主に警察畑を歩む。昭和20年1月沖縄県知事に任命され、疎開と食糧確保に尽力した。沖縄戦終結後、入水自殺したと見られる。島民の犠牲を最小限に食い止めようとした努力は高く評価され、26年「島守の塔」が島民により摩文仁に建てられた

避難が初めて組織的、大規模に

家財の整理や持ち物の準備もあり、3月中旬までの北部避難は3万人に止まった。3月23日、艦載機が来襲、翌日猛烈な艦砲射撃が始まると島民も避難を急ぐようになった。島田は25日、県庁を首里の地下壕に移し、職員に戦場行政に挺身するよう指示した。

人口課職員は、雨のように降ってく

●沖繩防衛軍の兵器は、心細いものだった

▽大田実少将(沖繩島連合陸戦隊司令官)が 1月20日  
小禄(おろく)海軍基地に着任して 驚いたのが  
隊員8千人の3分の2が 航空隊や基地設営隊員  
実戦経験がなく 小銃も 隊員の3分の1程度  
後は 竹槍 空き缶に火薬を詰めた 手製手榴弾  
▽陸軍部隊6万7千は ともかく  
島民義勇兵2万5千の兵器も 同じようなもの  
▽15歳の少年兵は「自分たちの島は、自分たちで  
守るのだ」爆薬を渡されたが 重さが10キ。  
少年の体力では 2発しか 投げられない  
「自爆しろと言っているのに等しかった」

●米軍の沖繩作戦は3月26日、慶良間列島上陸から

▽艦船1,317隻 艦載機1,727機 動員兵力45万  
本島上陸前に 艦隊の給油・補給船舶停泊地  
水上機基地を確保する 用意周到な作戦  
▽狭い島で 住民は 砲火に追われ 悲惨だった  
「捕虜にはなりたくない」と 座間味島で172人  
渡嘉敷島では 350人が 集団自決した  
▽4月1日朝 上陸用舟艇千数百隻が 嘉手納海岸に  
最前線の第1報は「只今9時10分、本島西海岸  
一帯は、米軍舟艇のために海の色が見えない」  
▽米軍の方は 予期していた「バンザイ突撃」もなく  
「エープリル・フール」の声も 出たほど  
戦死28人を出しただけで  
北・中飛行場を占領 5万人が 上陸を終えた

●第32軍にとっては、予定の行動だった

▽後退を続けながら 首里北方防衛陣地に  
米軍が 南下して来るのを 待てばよかった  
▽ところが 上級司令部には  
消極的 兵力温存主義だと 映った  
▽「攻撃督促」の干渉は 4月2日から始まった  
連合艦隊司令部が「茲十日間敵の北・中飛行場  
使用を封ずる為、主力を以て当面の敵に対し  
攻勢を採られんことを熱望する次第なり」  
3日に 第10方面軍 4日には 参謀本部も  
参謀次長名で「飛行場制圧」を 要望して来た  
▽軍司令部内の空気も 微妙に 変化してきた

る砲弾をかいくぐって避難督励に駆け回ったし、食糧配給課員も、夜通しで食糧の分散輸送に当たった。

北への道路は避難民であふれ、軍の行動に支障が出て、第32軍は31日、北部への「移動停止命令」を出したほどだったが、艦砲射撃が始まって5万人が避難し、米軍上陸までに計画の8割が何とか北部へ避難出来た。

…… 学生、生徒も動員された ……

県民男子の防衛召集が行なわれて、2月19日、中学校単位の防衛隊も組織された。総員1,685人で「鉄血勤王隊」と命名されたが、みんな「明けても暮れても、掘って掘りまくった」

大田昌秀さん(前神懸輝)も、師範学校在学中に非常召集を受け首里城の地下壕に入ると、任務は情報伝達。各部隊に「沖繩新報」(地新聞)を配ったり、戦況を知らせたりしたが、情報に飢えている島民や末端の兵士には非常に喜ばれたという。

師範女子部や女学校の生徒543人は看護婦の訓練を受けていたが、3月25日、「南風原(はなびる)の陸軍病院に集合せよ」の命令で入隊した。師範と県立第1高女の校章が共に白百合。校友雑誌の名前が師範が「しらゆり」、第1高女が「おとひめ」。それを合わせて「ひめゆり部隊」と命名された。

— 揺れていた「沖繩戦」の位置付け —

参謀本部の本音は「本土決戦準備の時間稼ぎ。玉砕もやむを得ない」だったのに、海軍は7日に戦艦「大和」を特攻出撃させたことでも分かるように「航空決戦に寄与する攻勢作戦。沖繩戦で有利な態勢が出来れば、これを契機に和議に踏み出すことも出来るし、国民の結集も図れる」とした。

▽もともとが 積極攻勢論者の長(鏑根)

八原の反対を押し切り 2回の攻撃をしたが  
圧倒的な米軍火力の前に 半数が死傷 失敗した

●米軍の首里戦線総攻撃は、4月15日から始まった

▽正面を守る第62師団が 戦力の半分を失うと  
第32軍首脳部にも 焦りが出てきた  
持久戦略を捨て 5月4日未明に 総攻撃決行へ  
八原(佐)は反対したが…

牛島(軍令官)に呼ばれ「貴官は攻勢の話が出る  
たびに反対するが、すでに軍は全運命を賭け  
て攻勢に決めたのだから、攻勢の氣勢を殺ぐ  
ことのないように」牛島から注意されたのは  
後にも先にもこの時だけだったが、「今回の攻  
撃は、無意味な自殺攻撃に過ぎぬと断言致し  
ます。しかし、すでに閣下が決心されたこと  
であり、職責に鑑み、全力を尽くす考えです」

▽総攻撃は 午前4時50分 砲兵部隊の砲撃で  
始まったが 正面から 力で押す戦法は  
火力が 段違いの米軍には 通用しなかった  
7千の死傷者を出し 大砲の半分が 破壊された  
砲弾も 1日1門10発に 制限しても  
5月いっぱい 持つかどうか

▽牛島は 5日午後6時 攻撃中止命令を出した  
八原に 「貴官の判断は正しかった。東京を出発  
する際、陸軍大臣も参謀総長も、玉砕をするなど  
固く申し付けられた。軍の主力は消耗してしま  
ったが、最後の一人まで戦い続ける覚悟である。  
今後は一切任せる。思う存分自由にやってくれ」

▽八原が考えたのは 本島の南端  
東西8km南北4kmの 喜屋武(きやん)半島に  
新しい陣地を築き 主力を移して 戦うこと

●5月21日、首里最後の防衛線の東西の丘が奪われた

▽牛島も 22日「喜屋武半島後退」を 決意する  
▽問題は 首里戦線背後の 12万の避難民が  
この退却戦に巻き込まれれば どんな混乱に  
しかも 南部島尻地区の住民14万が  
新たな戦場に 放り込まれることになる

…… 洞窟陣地の戦い ……

19日朝には、40分間に1万9千発の砲  
弾が撃ち込まれ、650機の艦載機がナ  
パーム弾を投下、18隻の戦艦、巡洋艦  
が艦砲射撃をしてきた。それでも、軍  
司令部の地下壕は、びくともしない。  
大型の砲爆弾にグラグラ揺れる程度  
で、中型以下はポンポン跳ね返した。  
ただ洞窟生活の苦痛は、太陽がない  
こと、空気の流通が悪く湿度が100%  
近いこと。米軍の砲撃は、食事をとる  
ためか、朝夕6時と7時の間は止まる。  
外へ出て、思いきり空気を吸った、  
米軍が前進して来ると、洞窟内に隠  
してい野戦重砲を引き出して砲撃、  
すぐまた洞窟内に戻して上空を飛び  
回る敵機の目をくらます。米軍は、最  
新式の聴音機を前線に送り込んで、  
洞窟陣地を一つ一つ爆破していった  
が、1日あるいは2日がかかりで、やっ  
と一つの丘を占領する戦闘が続いた。

—— 知念半島を避難地に指定したが ——  
第32軍は、守備部隊を配置してなく  
戦場になる恐れのない東側の知念半  
島に避難させることにし、軍食糧、衣  
服の自由使用も許可した。各部隊、鉄  
血勤王隊を通じ避難民に伝えたが、  
混乱する戦場ではなかなか徹底しな  
い。軍自体も撤退作戦に忙殺され、県  
側がこの方針を知ったのは29日の軍  
との連絡会議。余りにも遅過ぎた。

…… 降りしきる雨の中、避難民は ……

沖縄の梅雨は5月11日から始まって  
いた。軍も県も、どんどん南下して来  
る避難民を知念半島に誘導しようと  
「東へ向かえ」と指示したが、米軍の  
進撃が早く軍隊と離れることに不安  
を感じる避難民の耳には入らない。  
数分先も見えない暗闇の中、天秤棒

▽5万将兵は 27日夕から 5梯団に分かれ  
首里を後にしたが 軍司令部が立て籠もるのは  
喜屋武半島南端 摩文仁(まぶ)の洞窟

- 24日夜には、陸軍「義烈空挺隊」が沖縄に突入した
  - ▽九七式重爆撃機(艦艇2人)に 戦闘員12人が乗り込み  
北 中飛行場に 胴体着陸させて  
機関銃 手榴弾 爆薬で 攻撃しようとした
  - ▽隊長の奥山道郎(たか)は 26歳  
母親に宛てた遺書に「絶好の死に場所を  
与えられた私は、日本一の幸福者であります」
  - ▽4機が 航路を誤って引き返し  
夜10時過ぎ 8機が突入したが  
対空砲火に撃墜され 強行着陸成功は 1機だけ  
9機を破壊炎上 29機に損傷を与え 飛行場は  
7万ガロンのガソリン炎上で 翌朝まで使用不能
  - ▽1人が 敵中を突破し 奇跡的に生還したが  
奥山(たか)以下111人は 戦死した
  - ▽大本営は 25日「敵を混乱に陥らしめ、大なる戦果  
を収めつつあり」と 発表したが  
撤退を急ぐ日本軍には これに呼応して  
反撃する力は もう 残っていなかった

- 米軍は6月4日朝、海軍が守る小禄に上陸して来た
  - ▽太田(たか)は 6日夕「戦況切迫セリ」  
最後の戦況報告を 大本営に打電し  
「身はたとへ 沖縄の辺に 朽つるとも  
守り遂ぐべし 大和島根は」の 辞世を添えた
  - ▽その夜 海軍次官宛てに  
「こう云うことは、本来県知事か第三十二軍司令  
部が報告すべきことだろうが、その余力がない  
ようなので、代わって知らせる」と 断って  
島民の 軍に対する 涙ぐましい協力を打電

#### 太田(たか)の電報

「…本職ノ知レル範囲ニ於テハ県民ハ青壮年  
ノ全部ヲ防衛召集ニ捧ゲ 残ル老幼婦女子ノ  
ミガ相次グ砲爆撃ニ家屋ト財産ノ全部ヲ焼却  
セラレ 僅ニ身ヲ以テ軍ノ作戦ニ支障ナキ場  
所ノ小防空壕ニ避難 尚 砲爆撃下(数字不明)風雨  
ニ曝サレツツ 乏シキ生活ニ甘ンジアリタリ

に食べ物、鍋釜を吊し、子供を背負い  
手を引く母親、杖にすがる老人。泥田  
のような道を、ひたすら歩き続けた。  
夜は照明弾に身を伏せ、昼は木陰、洞  
窟に隠れた。洞窟を見つけても、兵隊  
に「ここは陣地になる。お前たちはも  
っと後ろに下がれ」と追い出される。  
しかも何とか洞窟に入っても、同じ  
洞窟に長く留まることは許されなかつた。  
洞窟はどんなものでも、米軍の  
攻撃対象になったのだ。

#### 高見順(たかみ)は日記に(6月4日)

沖縄の窮迫化を新聞は伝えている。那  
覇市内、首里城址に敵は侵入したとい  
う。沖縄も駄目なのだろうか。沖縄が敵  
の手に落ちたらどうなるのだろう。

#### 高見 順(たかみ・じゅん)

明治40(1907)～昭和40(1965)福井県生  
まれ。作家・詩人。本名は高間芳雄。昭和  
10年左翼崩れの苦悩、退廃を描いた「故  
旧忘れ得べき」で注目を浴びた。戦中か  
ら死に至るまでの「高見順日記」(8巻)を  
残す。死後、文化功労者を追贈される

#### 海軍一家の大田(たか)の遺族

大田は、20歳を頭に4男7女の父親だ  
った。大田夫人の実家を継いで、落合  
姓になった三男峻さんは当時6歳。海  
上自衛隊に入り、平成3年の湾岸戦争  
で湾岸派遣掃海部隊指揮官。

末っ子、11番目の四男豊さんは大田  
が沖縄着任3ヵ月後に生まれたが、や  
はり自衛隊に入り父親が戦った沖縄  
基地隊司令を務めている。

四女昭子さんは、ニュージーランド  
に住み、自衛隊練習艦隊が訪問する  
たびに歓迎して、平成12年、瑞宝章を  
贈られている。

而モ若キ婦人ハ率先 軍ニ身ヲ捧ゲ 看護炊事  
ハモトヨリ 砲弾運ビ 挺身斬込隊スラ申出ル  
モノアリ 看護婦ニ至リテハ軍移動ニ際シ 衛  
生兵既ニ出発シ身寄無キ重傷者ヲ助ケテ沈着  
ニ行動(黙黙) 沖縄県民スク戦ヘリ 県民ニ対  
シ 後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」

▽太田は 部下に 自力で行動出来る者は  
脱出するよう 命じて 13日午前1時  
ピストル自決した 54歳だった

●米軍の喜屋武半島総攻撃は、6月9日から始まった

▽新戦線で 掌握出来た兵力は3万

小銃を 持たない者も多く

後は 竹槍に爆雷 大砲も 数門しかない

17日には最後の軍司令官命令

「親愛なる諸子よ、諸子は勇戦敢闘、実に三か  
月、すでにその任務を完遂せり。諸子の忠誠勇  
武は燦として後世を照らさん。今や戦線錯綜  
し、通信もまた途絶し、予の指揮は不可能とな  
れり。自今、諸子は各々その陣地に拠り、所在  
上級者の指揮に従い、祖国のために最後まで  
敢闘せよ。さらば！この命令が最後なり」

▽18日からは「遊撃戦の指揮に当たる」として  
参謀たちの脱出が 始まった 行動は各人各個  
「鉄血勤王隊」の少年 2人を連れ  
「剣道教師」など 偽りの職名も 用意した

●牛島(20日付で大解難)は23日未明、長(巖根)と自決した

▽長が「切腹の順序はどうしましょう。私が先に  
失礼して、あの世のご案内をしましょうか」

牛島は「わが輩が先だよ」

長も「閣下は極楽行き、私は地獄行きだから、お  
先に失礼しても、ご案内は出来ませんね。キン  
グ・オブ・キングズ(ウイスキー)でも飲みながら、時  
間を待ちましょう」

▽長は「義勇奉公 忠則尽命」と墨で大書した  
白ワイシャツ姿になり「八原、後学のために  
予の最期を見ておけ」と 腹を切ったという

…… 米軍からは降伏勧告文 ……

バックナー中将(精10軍司令官)は「歩兵  
戦術の大家である牛島將軍よ、予も  
また歩兵出身指揮官である」こうい  
う書き出しで、孤立無援、劣勢な兵力  
で善戦したことを称賛し、「さりなが  
ら、今や戦勢は決した。速やかに戦い  
を止め、人命を救助せられよ。明十二  
日摩文仁海岸の軍艦上に当方の軍使  
を待機せしむるべきをもって、貴官  
においても軍使五名を選び白旗を持  
たせて同海岸に差し出されよ」

12日期限の降伏勧告文が、第一線  
を経て牛島の元に届いたのは15日だ  
ったが、牛島は「いつの間にか俺も歩兵  
戦術の大家になったなあ」と、破顔一  
笑したという。運命の皮肉か、バック  
ナーは18日、前線で戦死した。

牛島は一人でも多く助けようと

20日朝、米軍が摩文仁高地に迫って  
来ると、司令部将兵に「北、中飛行場  
地区に潜入し、敵航空部隊の攻撃に  
任ずべし」とか、次々と理由をつけて  
出撃命令を出した。それぞれ「適当に  
落ちのびよ」ということだった。

八原(姓)には「大本営に報告せよ」。  
長が「一気呵成は禁物だぞ。一日かか  
るところは、三日かかってやれ。お前  
に起死回生妙薬をやる」と、六神丸の  
ような薬と「先立つものは金だから」  
と500円札を5枚渡す。八原は「ああ泣  
けてくる」と手記に書いている。

…… 八原は米軍の捕虜に ……

24日夜、背広に着替えて洞窟を出た  
が、避難民5、60人の洞窟を見つけ、し  
ばらく気力、体力を養うことにした。  
ところが26日朝、米兵が「デテコイ！  
カムオン」と、威嚇射撃をしながら近  
付いて来た。皆殺しになると思い、避



▽辞世は 牛島が「秋待たで 枯れゆく島の青草も  
み国の春に よみがへらなむ」

長は「醜敵締帯す南西の地 飛機空に満ち  
船海を圧す 敢闘九旬 一夢の裡(うち)  
万骨枯れ尽くして 天外に走る」

— 「ひめゆり部隊」39人の悲劇的な最期 —

6月18日夜、沖縄師範と県立第1高女の看護隊に解散命令が出て、糸洲の陸軍病院分室に集まることになった。第1外科、第2外科の者は無事到着したが、第3外科の43人が学生服に着替え、「海行かば」を歌い終えて、洞窟を出ようとした時、米軍の攻撃が始まった。戦死あるいは自決し、助かったのは4人だけ。この真壁(緋)の洞窟が、いま「ひめゆりの塔」の建つ所。

●大本営は6月25日、「沖縄戦終結」を発表した

▽「…沖縄方面戦場の我官民は敵上陸以来島田叡知事を中核とし挙げて軍と一体となり皇国護持のため終始敢闘せり」

▽知念半島への避難が スムーズにいったら  
住民の犠牲は もっと 少なくてすんだはず

▽牛島が 喜屋武撤退を決断した時(5月22日)

真っ先に 県に連絡していたら

島田(輝)が掌握していた 400人の警官により  
避難指示は もっと 徹底していたら

▽軍と避難民の南下が 同時に 行なわれたら  
どんな混乱になるか 戦場心理 群衆心理が支配

▽一旦は 知念に 向かった人も

米軍が迫っていると知ると 怖じけづいて

戻ったり 軍隊と離れるのを 恐れて

軍と共に 米軍の集中砲火を 浴びる結果に

●米軍の作戦予定期間は、40日だった

▽第32軍は 圧倒的な 戦力の違いの中で 86日間  
長期持久戦に耐え 多大な損害を与えた

— 米軍の沖縄戦の損害 —

戦死は陸上部隊7,374、水上部隊4,907人と計  
12,281人。負傷も陸上58,018、水上6,204人。

難民に「諸君が賛成なら、英語を話せる自分が交渉しよう」全員が難色を示したが、「大丈夫だ。私の言う通りにしなさい」と、洞窟入り口の米兵に「皆を連れて出て行くから撃つな」

全員無事に収容所に収容されたが、八原は米軍作業に従事しながら脱出の機会をうかがっていた。米軍に協力して難民か軍人かを識別する調査係に、県庁課長や日本軍将校もいる。事情を話せば味方になってくれるだろうと、その課長に身分を明かすと、たちまち米軍に通報され今度は捕虜としての収容。もっとも、そのお陰で昭和21年1月浦賀に送還され、56年に郷里米子で78歳で亡くなっている。

— 島田の最期は、分かっていない —

15日夜、糸満の鍾乳洞に県職員を集め、「県の活動を停止し行動の自由を認める」と言い渡すと、軍司令部地下壕に移っている。野村勇三(毎日新聞沖縄支局長)が脱出の別れを告げると、「薬もあるし短銃も持っている。だが、こんな洞窟に自分をさらしたくない」野村が投降を勧めても、「県民にこれだけの犠牲を出しては、生きておれまい」県庁職員も、458人が殉職していた。遺体が確認されていないことから入水自殺したと見られるが、昭和26年、島民の手で摩文仁岳に「島守の塔」が建てられた。

— 九州上陸作戦は11月1日に —

トルーマン(大統領)は6月18日、陸海軍首脳を集めて対日進攻作戦を検討した。マーシャル(参謀長)は「空襲だけで日本を屈伏させるのは無理だ」と、11月1日の九州作戦を主張した。

リーヒ(大統領参謀長)が「沖縄戦なみ、九州作戦に要する全兵力76万余りの35



▽硫黄島に続いて 沖縄での苦戦

本土進攻に伴う 損害見積り多さが  
アメリカ政府を 慎重にさせ

ソ連参戦 原爆投下の必要性を 再認識させた

▽日本は とりあえずは 一息つける 貴重な時間  
「終戦工作」を 急がなければ ならなかった

●戦争末期、空から大量に降ってきた宣伝ビラ「伝単」

▽サイパン島の 米軍ラジオ放送「アメリカの声」

周波数 放送時間帯を 知らせるビラ

▽その放送は 5月に入って

「日本の運命に重大な問題について、  
特別連続放送を行なう」と 繰り返していた

第1回放送は5月8日

「大統領のスポークスマン」と名乗るエリス・カザリアス(輝大佐)はこう話し出した。「私が選ばれたのは、日本にとって、このワシントンにとっても平和そのものであったあの二十年間というもの、私が終始、日本人たちとは友人であったばかりか、現在は、あなた方の祖国を蔽い始めたこの破局を食い止めるべく、私が全力を尽くしてきたからであります」

そして親しい友人として、海軍大臣米内光政の名前を挙げ「米内大將は、将校の時代に語学生として行っていたロシアから戻ってのち、私と交わした会話の数々を思い起こしていることでしょう」と付け加えた。

●ザカリアス(戦時情報局心理戦課長)を動かしたのは…

▽鈴木貫太郎(首相)が ルーズベルトの急死(4月12日)に  
「深甚な弔慰」を 表明したことだった

ザカリアスは「サムライの心を感じた」

▽来日時代 鈴木(当時総長)の話 を 聞く機会があり  
人柄にも 感銘を受けていた

「連合側が、ある種の満足出来る条件さえ認めれば、「最後の一兵まで」という軍の豪語とは関係なく、鈴木氏の指導のもとに日本は武器を捨てるのではないかと。今こそ日本に対して心理戦を開始すべき時機が熟したと判断した」

「%、27万人の損害を覚悟すべきだ」と指摘すると、マーシャルは「戦争には手軽で血を流さない勝利の道はあり得ない。これは憂鬱な事実である」

結局トルーマンは29日、暗号名オリンピックの九州作戦を承認した。

「伝単」

米軍は、日本に対する心理作戦の武器として「紙の爆弾」を大量に投下した。昭和20年2月16日、関東・東海地方に撒いたのを皮切りに、終戦まで458万枚もばら撒かれた。軍閥非難、空襲予告、戦争の実情など様々で「中身は見ると、拾った者はすぐ憲兵・警察に届けろ」と、厳しいお達しが出た。

富山市は8月1日夜、最後の空襲被害を受けた街だが、朝から「今夜富山がやられる」との噂が流れ、異様にざわついていった。4、5日前に黒地に白の大きな文字で「空襲予告」、その下に「この都市が米軍の次の攻撃目標です」

こう書いたビラが撒かれ、不安に駆られた人たちが大八車に家財を積んで、避難し出したのだという。

米内 光政(よない・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大將。大正4年から2年間ロシア駐在。昭和11年連合艦隊長官。12年海相。15年1月首相に就任したが日独伊三国同盟に反対したため、陸相辞職で7月総辞職。19年7月現役に復帰し、小磯、鈴木内閣海相となり、終戦に尽力した

米内とザカリアスの仲

大正11年、ワシントンで海軍軍縮会議が開かれた時、当時中佐で、軍令部勤務の米内の担当は、米英がどのような案を出して来るか、を探ること。東京駐在の米英の海軍武官を新橋の

●「ザカリアス放送」も、米内を動かした

▽3日後の5月11日 前副官横山一郎(海軍少将)を呼び  
「モスクワへ、武官として行ってくれ」

— 米内は、何を考えたのか —

5月11日は、最高戦争指導会議が構成員だけ、首相、外相、陸海相、参謀総長、軍令部総長の首脳6人だけで開かれ、①ソ連の参戦防止②出来ればソ連の中立を日本に好意あるものにさせる③ひいてはソ連をして米英と日本との平和を斡旋させる。この3点で合意が出来、「他言無用、絶対秘密」を申し合わせた日だった。

ソ連の助力で終戦出来たとして、米英との話し合いが直ちに必要になる。横山であれば、モスクワ駐在の米英海軍武官と接触し交渉出来るだろう。またザカリアス放送から、アメリカは無条件降伏の要求を緩和し、日本に受け入れやすくする狙いを、感じ取っていた。

▽もっとストレートに 対米交渉出来る

ルートがあったのに なぜ 推進しなかったのか

▽中でも 藤村義朗(海軍少将)の「ダレス工作」

▽藤村は 昭和20年3月21日 スイス駐在を命じられ

陥落の迫ったベルリンから ベルリンに脱出

▽目的は スイスで 対米和平の道を開くこと

チューリッヒ在住の 親日・亡命ドイツ人

フリードリッヒ・ハック(Friedrich Hack)を

通じて その布石を 打っていた

— 日米開戦後、ハックから藤村に手紙 —

「日本もとうとう、馬鹿なことをしたものだ。米英を相手に戦争をして、勝てるわけがない」とあったが、最後に「慈愛深き日本海軍のために、今こそ身を挺して報いたい」決意を披瀝、「もしベルリンの武官が承認するなら、自分がスイスで米英と何か連絡の方法を準備しておこう。一本、裏道を開いておこうじゃないか」

▽緒戦の 連戦連勝の時

藤村も 敗戦なんて 予想もしていなかったが

「戦争は、その国で一番都合のいい時に始め、一番利益の大きい時に止めるのが常道だ」

— 10 —

料亭に招いたり、招かれたりして、情報交換をしたが、その時、毎晩のように顔を合わせたのが語学生という触れ込み情報将校ザカリアスだった。

鈴木 貫太郎(すずき・かんたろう)

慶応3(1867)～昭和23(1948) 大阪生まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て大正14軍令部長。昭和4年侍従長となり、二・二六事件で襲撃され、瀕死の重傷。19年枢密院議長。20年4月首相に就任し、「聖断」により終戦の道を開く

…… 驚いたのは横山 ……

昭和6年少佐の時にエール大学に留学し、15年駐米武官。日米開戦後17年8月に交換船で帰国し副官に。5月1日少将に昇進、副官は大佐が決まりで、どこかへ転出するだろうとは思っていたが、まさかソ連とは。

「アメリカのことはよく知っていますが、ソ連のことは全然知りません。ロシア語のアルファベットすら分かりません。店の名前も、駅の名前も分からない武官に、何が出来ますか」

ところが米内は「ソ連行きの使命は聞くな。ロシア語は勉強しなくてよい。堪能な通訳をつける。ただ君にモスクワへ行って貰いたいのだ。すぐ、モスクワ行きの準備をせよ」

藤村 義朗(ふじむら・よしろう)

明治40(1907)～平成4(1992) 大阪生まれ。海軍中佐。昭和15年ドイツ駐在武官補佐官。20年3月スイス駐在武官となり終戦工作に当たる。戦後、貿易会社経営

— 日本海軍と関係の深いハック —

ハンブルク大学を出た経済学博士。極東に関心を持ち満鉄の顧問をしていたが、大正3年の第1次大戦に従軍、

▽藤村は「どっちみち、戦争終結も考えておかねばならない」武官横井忠道(大佐)の了解をとり「アメリカのしかるべき人と接触するルートがあるなら、道をつけておいてくれ」  
▽藤村は「軽い気持ちで書いたんだが、これが後になって役立つとは、夢にも思わなかった」

●藤村がベルリンに着くと、ハックが待っていた  
▽「和平工作を本格的にやる積もりで来た」  
「それならOSSを通ずるのが一番いいだろう」

### OSS

アメリカの戦略情報機関(Office of Strategic Services)。第2次大戦勃発直後、大統領命令でヨーロッパに作られ、総局長はアレン・ダレス(Allen Dulles)。戦後CIA(中央情報機関)が出来ると長官となり、当時大統領顧問ジョン・フォスター・ダレス(戦国務長官)の弟。スイスを中心に、パリ、ロンドン、ストックホルム、リスボンなどに支部を置いて活発な活動をしていた。

▽藤村も「サンライズ作戦」を知り 4月23日  
ハックに ダレス機関への正式交渉を 依頼した

●藤村は5月2日、ダレスと会見した  
▽迎いの車が来て 市内をグルグル走り回った後 一軒の民家に 連れ込まれると 背広姿のダレスが現われ 気軽に「やあ」  
▽藤村は 英語で15分ほど「和平を結びたい。これ以上、無益の殺生はしたくない。私は大本営の人間だから、大本営と海軍は必ず説得する」  
ダレスは 終始 無言だったが 部下のポール・ブルームが「君が今言ったこと、君自身のキャリアを文書にして出してくれ」  
<ポール・ブルーム>  
横浜生まれの外交官。戦後22年米国大使館員として来日。29年引退後、藤村の貿易会社役員に  
▽翌3日 ダレス機関から「迅速なる和平の達成は米国側代表部も希望し、そのために最善の努力を惜しまない。米国側の準備は整っている。日本側はどうか」と 回答してきた

青島で捕虜となり四国の収容所に収容された。釈放後も日本に留まり、ドイツの潜水艦技術や器材を斡旋して日本海軍との付き合いが始まった。

帰国後、日本通としてリッベントロープ(外相)に重用され、極東問題顧問。日独防共協定(昭和11年締結)も、大島浩(艦艇長官)を自宅でリッベントロープと会見させ、橋渡ししたのがきっかけ。

ところが、世界制覇を目指すヒトラー独裁体制に疑問を持つようになり、敢然ナチス批判をしたため「同性愛者」の罪名で投獄された。

心配したベルリン駐在海軍武官が、奔走してハックを釈放させ、東京に送り込んだ。しかし東京もオット(ドイツ大使)が本国送還を画策して安全でなくなってきた。海軍は昭和13年春、スイスに亡命させ、海軍の物品購買代理人に指定して生計も成り立つようにしてやった。

### 大島 浩(おしま・ひろし)

明治19(1886)～昭和50(1975)岐阜県生まれ。陸軍中將。昭和9年駐独武官。ナチスとの接触を深め11年日独防共協定を推進。同年予備役となり駐独大使。日独伊三国同盟を結ぼうと積極的に動いたが、14年独ソ不可侵条約締結で辞任。15年大使に再任、軍事同盟実現に当たる。戦後A級戦犯として終身刑。30年出所

### 「サンライズ作戦」

昭和20年4月初め、イタリア戦線・ドイツ軍最高指揮官ヴォルフ(大将)は、ヒトラーの「徹底抗戦」の厳命に抗し、連合軍と単独停戦した。ダレス機関の工作が実ったもので、ロンバルディア地方は悲惨な戦火から免れた。

●藤村は5月8日午後、「緊急第1電」を発信した  
▽米政府とのパイプは 通じたが どう報告するか  
戦争中 現役軍人が 上司の命令もなく  
和平交渉することは 軍律に照らせば 銃殺もの  
▽そこで 話を逆にして ダレスの方から  
ハックを通じて 申し入れてきたことにした  
▽他の 雑多な電報に 埋没しないよう  
「親展、至急、軍機」の 最高機密暗号電報に指定  
じかに 大臣 総長に 届くように 気を配った

●東京からは、何の返事も来ない  
▽相次ぐ空襲で 通信網が混乱し  
東京からの返電は 8~10日かかっていた  
▽ダレス機関は「日本側の回答次第によっては、  
いつでも交渉を開始出来るよう待機している」  
▽藤村は 20日の「第7電」で ドイツの惨状を報告  
「今日の独乙の姿は明日の日本の姿である」

●5月21日、待ちに待った軍務局長の返電  
▽「貴武官のダレスとの交渉趣旨はよく分ったが、  
どうも敵側の謀略の様に思える節があるから、  
十分に注意せられ度い」  
▽藤村は 即日「第8電」で 謀略を否定した  
「ダレス氏以下一同は、日本からの真面目な回答  
を期待している。又仮に百歩譲って敵の謀略で  
あるにしても、元も子もなくした今の独乙の  
様なドン底に陥るのを防げれば、その方がより  
有利であろう。今日の日本に之以上の良い条件  
の整った如何なる手蔓があるのか。本電に関し  
ては速かに回答せられ度し」  
▽6月に入っても 返事はなく  
藤村は ダレスに 和平の具体的条件を打診した

#### 藤村の出した和平条件

①国体、および天皇の地位をそのままにすること。この点、特に米側の意見を聞きたい②現在残っている商船隊を、そのまま残すこと。日本は島国だから船がなければ生存出来ない③台湾と朝鮮はそのまま残すこと。これは食糧源だから、日本にとっては不可欠である。

#### 藤村の「緊急第1電」

宛 海軍大臣、軍令部総長  
発 スイス在勤武官  
指定 親展、至急、軍機、暗号  
五月三日ベルンに於て、在スイス米  
要人ダレス氏より、藤村に対し予て  
親交あるハックを介し、左の要旨の  
連絡申入れがあった。「速かに戦争を  
終息せしむる事は、単に日本のため  
のみならず、世界全体のために望ま  
しいことであり、日本が之を希望す  
るならば、余は之をワシントン政府  
に伝達し、その達成に尽力しよう」  
尚、之に対する本武官の意見は次の  
通りである。

一、ダレス氏は現在米政界の重鎮で  
リップマン、ステトニュース氏等と  
も親交があり、特にルーズベルト大  
統領の信任厚く、ル大統領に直結し  
ている人である。ダレス氏は今次戦  
争中スイスを中心とし、殆ど全欧に  
亙り米の政略戦争を指導して来た人  
であるが、特に去る四月初めに締結  
された北伊の単独講和は、ダレス氏  
の努力によるものであった。

二、ハックは在欧海軍首脳部と長年  
親交ある第三人で、絶対確実な仲  
介者である。目下交戦中のため我々  
はダレス氏との直接交渉を控えてい  
るが、ハックの仲介は絶対に信頼出  
来る。

三、伯林陥落も焦眉に迫った今日、  
日本の採るべき道は、速かに対米和  
平を図ることであると信ずるにつき  
敢えて具申する次第である。尚、本件  
は其の重大性に鑑み何分の御指示が  
ある迄、本官以外には厳密に保つべ  
し、速かに御指示を得度。

▽非公式ながら「①②はともかく、③の台湾、朝鮮は難しかろう」との回答があり 藤村は「アメリカ側の意向」として 打電した

- 藤村は、帰国して直接説得することを決意する  
▽ダレス機関に「東京まで私を送ってくれ」

「大臣、大将を寄越せ」

藤村の申し入れにダレス機関からは「君が東京に着いて和平だ、和平だと騒ぐと、銃殺されるのがオチだ。それよりも、東京から大臣でも大将でも条約にサイン出来る力を持った人物を呼び寄せられないか。東京で希望するなら、アメリカ側は日本からスイスまでの空路輸送を、絶対確実に引き受ける」と提案して来た。

▽藤村は 小躍りする思いで 6月15日「第21電」は 米内海相宛ての 親電として 今までの経過を報告し 最後に「今や閣下に残されている戦力、国力のすべてを捧げて、この対米和平を成就することが、唯一国に報いる道ではないでしょうか」

- 「藤村工作」は、外務省に移管された

▽米内海相から 20日に返電

「貴趣旨はよく分った。一件書類は外務大臣の方へ廻したから、貴官は所在の公使その他と緊密に提携し善処せられ度し」

▽藤村は「ようやく日本政府の問題になった」と喜んだが「藤村工作」はこの時点で終わった

▽ダレス機関に ハックをやって 伝えると 木で鼻を括ったような 冷ややかな態度

▽ダレスは 3日後「用があるので自分は南ドイツへ行くが、東京から連絡があったら、すぐ機関の者に伝えてくれ」と 言い残して

ポツダム会談出席のため 出発してしまった

- ダレス機関が、藤村との接触に応じたのは…

▽早期和平により ソ連参戦を防ぎ

日本本土上陸作戦に伴う

莫大な犠牲を 避けようとしたためだった

藤村の言葉

「尊敬する海軍大臣に対し、こんな電報まで打たねばならなくなったことを心から悲しんだ。一武官の言葉としては失礼過ぎると思い、一晚考えたが、もう時間的余裕はない。やってしまえ、と打った」

「ソ連参戦までに纏めねば」

藤村と共にベルリンを脱出し、藤村を助けて工作に当たっていた津山重美(大坂商船ベルリン駐在員から海軍嘱託)は、「ダレス機関は、当初から、日本の外務省は腰抜けで相手にならない。陸軍分らず屋、海軍なら少しは物分かりがいいと思って話している、とよく言っていた。それを外務省に移したのだから、相手はもう信用しない。

ダレス側は、特にソ連との関係を気にしていることが、言葉の端々にちらちら出ていた。仮にソ連が参戦すればどうなるか。日本は勿論だが、実はアメリカも困る。君の方はソ連に仲介を頼むそうだが、親の仇に仲人を頼むようなものじゃないか。出来るだけ早くこの話を纏めたいという話ぶりで、後で考えると、ソ連参戦までにこの話が纏らなければご破算にする — これがダレス側の肚だったと思う」

ポール・ブルームは言っている

「ダレスはイギリス、ソ連、中国には秘密にして、日米間に和平の下相談を取り纏め、イギリス、中国には日米政府間の正式な話し合いが持たれた時に、明らかにする段取りだった。そこへ六月二十日の外務省からスイス公使への暗号電報が入り、これを解読して、もうこの話はダメだ、と判断した。日本外務省の暗号電報を即日

▽ダレスは「藤村工作」が

ソ連に洩れた時点で あきらめたのだ

▽藤村は 21日 加瀬俊一(スイス公使)に呼ばれ

今までの経過を説明

「力を合わせて大いにやろう」と なったが

二、三回 簡単な問い合わせが あっただけ

▽藤村は 3分~5分の長文電報を 35本も打電

じりじりするうちに 原爆投下 ソ連参戦に

●ソ連参戦、原爆投下を防げるチャンスだったのに…

▽海軍中央部は いったい 何をしていたのか

保科善四郎(聯艦長)は「藤村電」を見て

「当時、私は何とかして終戦の方途を見付け出し度いと念願して居たから、この藤村電を見て大変うれしく感じた。私はこの電報を米内海相に持って行って御目にかけてが、海相もうれしそうであった」

富岡定俊(聯艦副長)も

「たとえ謀略でも、当時最も知りたかった米国側の終戦条件の概略でも推察し得る、端緒になるものと大変嬉しく感じた。そこでこの交渉を上司に進言することを決心した」

▽それでは「謀略注意」の軍務局長電(5月21日)は？

●5月29日付で、軍令部首脳が代わっていた

▽総長に豊田副武(大将) 次長に大西滝治郎(中将)

次長の小沢治三郎(中将)は

海軍総司令長官兼連合艦隊長官に転出

▽大西は「神風特攻隊」生みの親 戦争継続一本槍

▽富岡は「大西に、きっと反対されると思い、順序としては間違っているが、直接総長に進言しよう。そして総長から次長を説得してもらって、海軍が一致して藤村電の趣旨を実現させるべきだ」

▽ということは 富岡が「嬉しく感じた」のは

「藤村第1電」(5月8日)ではなく

「大臣、大将を寄越せ」(6月15日)の電報

▽それまでの「藤村電」は 下で処理されていた

……「第1電を見て疑問を抱いた」……

末沢慶政(聯艦副長)は、「和平工作という重大問題を、米国側が日本の海軍中佐に申し入れ

解読していたのは、我々だけでなく、イギリス、ソ連とも同様で、その動きは全て筒抜けになっていたのだ」

加瀬 俊一(かせ・しゅんいち)

明治30(1897)~昭和31(1956)東京生まれ。昭和17年駐イタリア公使。19年スイス公使。戦後はメキシコ、西独大使歴任

藤村の言葉

「毎日祈るような気持ちでおりました。このダレス交渉は、全戦局を通じて最も確実な、可能性の強い、正しい和平ルートであったと思います」

G H Q歴史課「終戦史資料」

マッカーサー司令部は、日本の陸海軍軍人20名ほどを歴史課嘱託にして戦史編纂に当たった。「降伏の決定」の1章が含まれることになり、昭和24年から25年にかけて宮中、外務省、陸海軍関係者から詳細に聴取した。

保科 善四郎(ほしな・ぜんしろう)

明治24(1891)~平成3(1991)宮城県生まれ。海軍中将。駐米大使館付武官補佐官、兵備局長を歴任し昭和20年5月軍務局長。戦後30年から42年まで衆院議員

富岡 定俊(とみおか・さだとし)

明治30(1897)~昭和45(1970)長野県生まれ。海軍少将。昭和15年軍令部作戦課長。南東方面艦隊参謀長、第11航空艦隊参謀長を経て19年12月作戦部長

豊田 副武(とよだ・そむ)

明治18(1885)~昭和32(1957)大分県生まれ。海軍大将。軍務局長、第4、第2艦隊長官を経て昭和19年5月連合艦隊長官。20年5月軍令部総長。戦犯で収容されたが、23年釈放。著に「最後の帝国海軍」

て来た点に、了解し難いものが感ぜられる、換言せば、国際的に有名な米人が、日本の権威ある外交官を通じて申し入れて来るべき性質のものなのに、日本海軍が開戦前から対米戦争を嫌って居たのに着眼し、殊更にこれに探りを入れて来たのではないか、と疑いを抱いた」

▽「藤村工作」が海軍首脳の耳に入るまでに  
貴重な1ヵ月余りが空費されたことになる

●そして、富岡(作麟)の決意も実らなかった

▽豊田(巖)に直接自分の意見を述べたところ  
「君は専ら、作戦に心血を注いでおれば宜しい。  
和平の問題は、君は考えるべきではない」

▽保科(勲)も大西(幹)に反対され

「当時はなお、終戦を強硬に主張するようなことは遠慮しなければならない情勢だった。それで大西の主張が勝ちを占めた」

外務省に移管したことについては

「このまま放置すれば、ダレス提案は立ち消えになってしまう不安が感ぜられた。私どもは内心この提案を利用したかったが、正式ルートを通じなかったという理由で利用しにくかった。それで外務省に移すように計画したが、これにも大西が反対したので、軍務局長の所見として外相の所で適当に処理して貰うことにしたのだ」

●米内(勲)は、どう考えていたのだろうか

▽及川古志郎(勲)は「米内は、ソ連などを相手にするのではなく、寧ろ米国、英国と直接交渉の道を開くべきだとの意見だった」

— 米内は、こう考えたのではないか —

鈴木内閣の終戦工作難しさは、陸軍の認めない終戦は終戦にならないことだった。「藤村工作」には軍令部が反対しており、当然陸軍も反対するだろう。ようやく、ソ連仲介の和平工作に陸軍も同意し、合意が成立した時点で、この対米直接交渉の是非を正式決定の場に持ち出せば、せっかくの合意が崩れるのではないか。

大西 滝治郎(おたし・たきじろう)

明治24(1891)～昭和20(1945)兵庫県生まれ。海軍中将。昭和18年軍需省航空兵器総局総務局長。19年10月第1航空艦隊長官に就任、レイテ決戦に「神風特別攻撃隊」を編成し、特攻作戦を採用。20年5月軍令部次長。敗戦翌日に自決した

小沢 治三郎(おざわ・じさぶろう)

明治19(1886)～昭和41(1966)宮崎県生まれ。海軍中将。南遣艦隊長官、第1機動艦隊長官を経て昭和19年軍令部次長。20年海軍総司令長官兼連合艦隊長官

末沢 慶政(すえざわ・よしまさ)

明治32(1899)～昭和56(1981)香川県生まれ。海軍大佐、巡洋艦那珂艦長などを経て昭和20年2月軍務局軍務第2課長

…… 豊田(巖)の言葉 ……

「藤村中佐を個人的に全然知らないもので、十分な信頼を持てなかった。それにダレスがドイツの終戦に大いに活躍したとの情報は、かえって逆効果だった。この藤村進言は、日本の戦意打診のパイロット・バルーンか、戦意阻喪の謀略以上には解釈出来なかった」

富岡(作麟)の言葉

「外務省へ回れば、おしまいです。外務省は陸海軍に挟まれていたのですから、この問題を処理出来るわけがないのです」

及川 古志郎(おいかわ・こしろう)

明治16(1883)～昭和33(1958)岩手県生まれ。海軍大将。昭和15年近衛内閣海相となり、海上護衛司令長官を経て19年8月軍令部総長。20年5月軍事参議官



▽昭和21年4月 帰国した藤村が 米内を訪ねると  
「ダレス機関に対する和平折衝を成功に導き得  
なかったのは、一に米内の責任であり、誠に申  
し訳なかった」と 詫びたという

●小沢が、軍令部次長に残っていたら…

▽鈴木内閣成立(4月7日)直後 吉田茂が

小沢を訪ねて来て「米英と直接交渉の橋渡しを  
したいから、海軍の潜水艦か飛行機を以て、自  
分を米英軍の戦線の後方に運んでくれ」

▽小沢は「突飛な話ではあったが、潜水艦を使って  
やる方法は研究の価値ある問題だと思った」  
富岡(作麟)に「誰にも言わずに、君だけ心得  
ていて貰いたい。実は吉田を潜水艦乗せて秘  
かに中立国に送り、終戦の交渉をしてもらっ  
たらどうか」と 話している

▽「藤村工作」では アメリカの方から「運んでやる」  
— 「ダレス工作」には陸軍ルートも —

スイス駐在陸軍武官岡本清福(麟輔)は、バー  
ゼルにある国際決済銀行理事北村孝治郎と為  
替部長吉村侃(かん)に依頼し、同銀行顧問・スウ  
ェーデン人のペル・ヤコブソンを通じて、ダレ  
ス機関に接触しようとした。しかし、ヤコブソ  
ンがダレスに会えたのは7月14日。ポツダム会  
談が始まろうとしている時、余りに遅過ぎた。

北村は、ハックから「藤村工作」を聞いていた  
が、「岡本が海軍には黙っていてくれと言うの  
で、一言も言わなかったが、陸海軍バラバラで  
なく、一緒にやっていたら、どうだったでしょ  
うかね」 陸海軍が提携どころか、競合してい  
たのでは、力を持つはずもなかった。

●海外終戦工作には、二つのスウェーデン工作

— スウェーデン王室を通じて —

一つは、朝日新聞常務鈴木文史朗が親しくし  
ていたスウェーデン駐日公使バッゲに持ちか  
けたもので、バッゲが20年4月に帰国する際、  
バッゲと旧知の元フィンランド公使昌谷忠(さ  
か・たけし)を介して、当時の重光葵外相、鈴木内閣

吉田 茂(よしだ・げい)

明治11(1878)～昭和42(1967)東京生まれ。外務次官、駐伊、駐英大使を歴任、昭和14年退官。17年6月木戸(内相)に「近衛(元首相)をスイスに派遣、和平のチャンスをとらえるよう」進言している。和平画策者として20年4月15日憲兵隊に逮捕。戦後東久邇、幣原内閣外相。21年鳩山一郎の公職追放で、自由党総裁、首相。5次の内閣を組織、講和条約、日米安全保障条約を締結。29年造船疑獄で総辞職。元老として大きな影響力を持った。国葬

木戸 幸一(きど・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。維新の元勳木戸孝允の妹の孫。昭和5年内大臣秘書官長。文相、厚相歴任。15年内大臣に就任。開戦前、東条を後継首相に推挙したが、戦争末期、反東条となり倒閣、終戦に尽力。A級戦犯で終身禁固刑。30年出所。著に「木戸幸一日記」

近衛 文麿(このゑ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。貴族院副議長を経て昭和12年第1次内閣を組織。支那事変で「国民政府对手ニセス」と声明し早期解決の道を塞ぐ。15年第2次内閣で日独伊三国同盟締結、枢軸外交、南進政策を推進。16年松岡外相を更迭、日米交渉打開に努めたが、10月総辞職。戦後、戦犯に指命され自殺

岡本 清福(おかもと・きよとみ)

陸軍中将。開戦時は参謀本部情報部長。南方軍参謀副長を経て昭和18年3月、日独伊三国の戦争指導を調整のため独伊連絡使として、ベルリンに派遣。19年スイス駐在武官。終戦の時「長く情報を担当していたが情報の誤りから日本を敗戦に導き、その罪浅からず、ここに死をもって詫びる」の遺書を残し、拳銃自殺

外相になった東郷茂徳にも話は通じていた。

もう一つは、スウェーデン駐在陸軍武官小野寺信(蘭州)が国王の甥に働きかけたもので、何れもスウェーデン王室からイギリス王室に和平の斡旋をして貰おうというものだった。

▽これらの工作が 動き出した頃は

日本の最高首脳部は「ソ連に仲介依頼」に

そのソ連は すでに 対日参戦を 決定済み

▽東郷(外相)とすれば 最終目的は終戦

難物の陸軍が 希望している「対ソ交渉」で

政策集団内部の 合意形成を 図ろうとした

渋沢信一(当時務録納長)の話

東郷さんは非常に手堅い人で、妙な所から来た話には、謀略の匂いがするといつて、滅多に乗らなかった。外交は正式の筋目を立ててやるべきだと、思っている人だった。それには米英のチャンネルを通すことだが、その方法、手段がどこにもない。バグゲとかダレスとかの話はあったが、国家の大事を賭けるほど、そのチャンネルを評価する気にはなれなかった。

▽東郷が 理論の筋を 立て過ぎた結果

一旦「ソ連仲介」と 決めてかかると

それ以外の話は 筋違いと 一切 斥けることに

●アメリカ国務省は、中国派に代わり日本派が進出

▽昭和19年5月 グルー(元駐日大使)が

極東問題局長になり 11月には 国務次官に

ホーンベック(前局長)は 対日強硬論者

▽グルーが大使時代 信頼していた

ユージン・ドーマン(参事)が 特別補佐官

デイックオーバー(参事)が 日本課長に

▽この人事に 注目したのが

南原繁(参事) 高木八尺(参事)

6月1日 木戸(内相)を訪ね

「国務省が日本派で占められている現在、日本は

アメリカと直接交渉をすべきだ」さらに

「沖繩戦が終わった後、陛下が和平を説かれることが、時局收拾のただ一つの方法だ」

鈴木 文史朗(すずき・ぶんしろう)

明治23(1890)～昭和26(1951)千葉県生まれ。本名文四郎。大正6年朝日に入り、論説委員、社会部長歴任。昭和20年常務で退社後、リーダーズ・ダイジェスト編集長。24年NHK理事。25年参院議員

重光 葵(しげみつ・あきら)

明治20(1887)～昭和32(1957)大分県生まれ。駐ソ、駐英大使を歴任し昭和18年東条内閣外相。小磯内閣に留任。A級戦犯で禁固7年。25年出所。27参院議員。改進黨総裁となり鳩山派と合同し民主党副総裁。鳩山内閣副総理・外相に就任し日ソ国交回復、国連加盟を実現した

東郷 茂徳(とうこう・しげのり)

明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。駐独、駐ソ大使を経て昭和16年東条内閣外相。大東亜省設置に反対、17年辞職。20年鈴木内閣で再び外相就任、終戦に尽力した。A級戦犯で禁固20年。著に「大戦外交の手記―時代の一面」

小野寺 信(おのでら・まこと)

明治30(1897)～昭和62(1987)岩手県生まれ。陸軍少将。昭和10年ラトピヤ公使館付武官。参謀本部ロシア課、陸大教官を経て15年スウェーデン公使館付武官

グルー (Joseph Clark Gerew)

1880～1965 米国務次官を経て昭和7年駐日大使。17年まで駐在、日米関係改善に努力した。交換船で帰国後19年5月国務省極東問題局長。11月国務次官、国務長官代理に就任。著に「滞日十年」

南原 繁(なはら・しげる)

明治22(1889)～昭和49(1974)香川県生まれ。大正10年東大教授となり、政治学を講義。戦時中も軍部に迎合せず、自由

●木戸は6月8日、「時局收拾案」を書き上げた

▽具体的な内容は

「天皇の親書携行の使節をソ連に送り、和平仲介を依頼すること」を提言したものだ

木戸の考えは…

「太平洋の問題をソ連を除いてやって見てもしようがない。大国として未だ中立の関係にあるソ連を除外して、スイスやスウェーデンを仲介するのはおかしいじゃないかという考えが、僕の頭には強かった」 (GHQの筆跡)

▽日本の終戦工作は「対ソ交渉」一本槍に

●海外での終戦和平工作は、みな個人的接触の範囲

▽国家としての後押しがなければ力を持ち得ない

▽明治の元老伊藤博文は日露開戦と同時に

終戦の布石 セオドア・ルーズベルト(大統領)と

ハーバード同窓の金子堅太郎をアメリカへ

▽吉田茂が提案していたように早くから

中立国に政府代表を送っておくべきだった

ダレスは著書「秘密の降伏」に

不幸にして日本の場合は、我々方に時間がなくなっていた。東京政府は、平和を確立する方法があるとの決心を固め、彼らが交渉しているアメリカ人がワシントンの最高権力者と直接の接触を保っていることを知る前に、モスクワが仲介者として姿を現わし、日本政府はソ連を通じて和平を求める決心をしたのだ。

もし、この交渉がもう少し時間を与えられていたとしたら、日本の降伏の事情は、もう少し違っていたものになっていたかも知れない。

▽藤村が昭和28年訪米してダレス(CIA館)を

訪ねるとまだ朝鮮戦争が続いていたが

しみじみと述懐したという

「あの当時、東京政府がスイスに於ける我々の提案をうまく受け入れていたら、アメリカは今日のような苦しみをしないですんだであろうし、世界情勢も、すっかり変わったんじゃないだろうか」

主義的立場を守り20年3月法学部長、12月東大総長。占領下、学問の独立を主張し、講和問題では全面講和を唱え、吉田首相と対立した。44年日本学士院長

高木 八尺(たかぎ・やさか)

明治22(1889)～昭和59(1984)東京生まれ。大蔵省を経て大正13年東大教授。米政治外交史研究の第一人者で昭和42年文化功労者。著に「米国政治史序説」

伊藤 博文(いとう・ひろぶみ)

天保12(1841)～明治42(1909)山口県生まれ。明治18年初代首相となり4次の内閣を組織、内閣制度。憲法制定など元老として力を揮った。ハルビンで暗殺

金子 堅太郎(かねこ・けんたろう)

嘉永6(1853)～昭和17(1942)福岡県生まれ。明治4年留学生としてハーバード大に学ぶ。農商相、法相歴任。日露戦争では米大統領など同窓に知己が多いことから、米国に特派され、講和工作に当たった。39年枢密顧問官



「沖縄戦と和平へ向けて」 関係年表

昭和	西暦	日付	出来事	昭和	西暦	日付	出来事
昭和37	1964	2. 10	ロシアに宣戦布告。日露戦争始まる	昭和20	1945	3. 25	沖縄県庁、首里城地下壕に移転
大正3	1914	7. 28	第1次世界大戦始まる			3. 26	米軍、沖縄本島西の慶良間列島上陸。座間味島で172人、27日には渡嘉敷島で350人の住民が集団自決
11	1922	2. 6	ワシントン会議で海軍軍縮条約調印			3. 31	避難民溢れ、軍は北部移動停止命令
昭和6	1931	9. 18	柳条湖で満鉄爆破、満州事変始まる			4. 1	米軍、沖縄嘉手納海岸に上陸し中・北飛行場を占領。5万人が上陸を終える
11	1936	11. 25	日独防共協定調印			4. 5	小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎に大命ソ連、日ソ中立条約不延長を通告
12	1937	7. 7	盧溝橋事件勃発。支那事変始まる			4. 7	鈴木内閣成立。戦艦大和、撃沈される
14	1939	9. 1	第2次世界大戦始まる			4. 12	ルーズベルト大統領死去
15	1940	9. 27	日独伊三国同盟、ベルリンで調印			4. 15	首里戦線に対する米軍総攻撃始まる。吉田茂、和平画策で憲兵隊に逮捕
16	1941	4. 13	日ソ中立条約、モスクワで調印			4. 23	藤村、ハックにダレス交渉を依頼
		6. 22	ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる			5. 2	藤村、OSS代表のダレスと会う
		10. 18	東条英機内閣発足。東条は陸相兼任			5. 4	32軍、総攻撃。死傷者7千を出し失敗
17	1942	12. 8	太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃			5. 7	ドイツ、連合軍に無条件降伏
		6. 5	ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失			5. 8	藤村、海相・総長宛にダレス工作打電。ザカリアス大佐、日本向け放送開始
		8. 7	米軍、ガダルカナルに上陸開始			5. 11	最高戦争指導会議、6人の首脳会議
18	1943	1. 14	米英首脳がカサブランカ会議。「日独伊三国の無条件降伏の原則」決定			5. 14	最高会議「和平にソ連仲介」方針決定
		9. 8	イタリア無条件降伏			5. 21	首里の防衛線、東西の丘陵奪われる。藤村宛に「謀略注意」の軍務局長電
19	1944	3. 22	陸軍、沖縄など防衛の第32軍編成			5. 22	牛島、喜屋武半島後退決意。住民避難地に知念半島を指定するが徹底せず
		5. 1	グルー元大使、国務省極東問題局長に			5. 24	義烈空挺隊8機、中・北飛行場を攻撃
		6. 6	連合軍、仏ノルマンディ上陸			5. 27	32軍5万、喜屋武半島へ向け撤退開始
		6. 15	米軍、サイパン島に上陸開始			5. 29	軍令部総長に豊田副武大将、次長に大西滝治郎中将。次長の小沢治三郎中将は海軍総司令長官に転出
		7. 1	大本営、長勇陸軍少将を沖縄に派遣、非戦闘員疎開について研究を命じる			5. 31	米軍、沖縄・首里地区を占領
		7. 7	サイパン島守備隊玉砕。政府、緊急閣議で沖縄島民の集団疎開を決定			6. 1	東大教授南原繁と高木八尺は内大臣木戸幸一に「対米直接交渉」を提言
		7. 8	長、中將に昇進し第32軍参謀長に			6. 4	米軍、海軍が守る小禄地区に上陸
		7. 18	東条内閣総辞職			6. 6	大田少将、海軍次官宛に「沖縄県民斯克戦ヘリ 県民ニ対シ後世 格別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と打電(13日附)
		7. 21	沖縄の第1次疎開752人、鹿兒島へ			6. 8	木戸「ソ連に仲介依頼」の時局收拾案
		7. 22	小磯国昭・米内光政連立内閣成立			6. 9	米軍の喜屋武半島総攻撃始まる
		8. 8	第32軍司令官に牛島満中將			6. 15	第10軍司令官バックナー中將の降伏勧告文届く。藤村、「大臣、大将クラスをスイスに送れ」のダレス提案打電
		8. 22	沖縄の疎開船「対馬丸」撃沈される			6. 17	最後の軍司令官命令(組織的疎開の終了宣言)
		10. 10	米軍機、沖縄空襲。那覇は壊滅的被害			6. 18	「ひめゆり部隊」の39人、洞窟で米軍攻撃を受け戦死。トルーマン、対日進攻作戦検討。バックナー中將戦死
		10. 20	米軍、レイテ島に上陸			6. 20	藤村宛に「外務省移管」の海相電
		10. 25	神風特別攻撃隊、レイテ沖に出撃			6. 23	牛島大将(20日附)、長と摩文仁で自決
		11. 24	B29、中島飛行機など東京を初空襲			6. 25	大本営、沖縄の組織的戦闘終結発表
		12. 13	泉守紀沖縄知事、上京して帰任せず			6. 29	トルーマン、九州作戦(11月1日)承認
20	1945	1. 9	米軍、ルソン島リングエン湾に上陸			7. 17	米英ソ三国首脳、ポツダム会談開く
		1. 20	陸戦隊司令官大田実少将、沖縄着任			7. 26	無条件降伏要求のポツダム宣言発表
		1. 26	32軍、1個師団を抜かれて陣地配備を変更、主力を首里北方丘陵に集める			8. 6	広島に原爆投下(9時15分長崎)
		1. 31	島田勲沖縄県知事着任。第32軍、17歳から45歳の県民男子を現地防衛召集			8. 8	ソ連、日本に宣戦布告
		2. 4	米英ソ三国首脳、ヤルタで会談			8. 9	ソ連軍、満州、朝鮮、樺太で侵攻開始
		2. 7	沖縄県、平時行政を戦時行政切換え			8. 15	敗戦。鈴木内閣総辞職(17日附内閣)
		2. 10	スターリン、ルーズベルトに「ドイツ降伏後2、3か月の対日参戦」を約束				
		2. 16	米軍、関東・東海地方に「伝単」投下				
		2. 19	米軍、硫黄島上陸。沖縄で中学校単位の防衛隊組織、「鉄血勤王隊」と命名				
		3. 10	334機のB29、東京大空襲。江東全滅				
		3. 17	硫黄島の日本軍守備隊全滅				
		3. 21	藤村義朗中佐(駐米海軍武官)、スイス駐在を命じられ、ベルンに脱出				
		3. 24	米艦隊、沖縄本島南部を艦砲射撃				
		3. 25	沖縄師範や県立第1高女の生徒、陸軍病院に入隊。「ひめゆり部隊」と命名				